

情報史研究の戦略：情報史における情報学史の役割を中心に Strategy for the History of Information

村主朋英*

Tomohide Muranushi

Abstract

Following the previous study, concentrated on the framework and methodology of the history of information, problems of strategy for the history of information and the roles of the history of information science in the history of information are discussed. Study of the history of information is defined as viewing the history from the point of view of information science. It is discussed that the field of the history of information is interdisciplinary area, and that the whole body of the objects of the research is divergent and multidimensional. The field needs to establish procedures to keep its coherence. Complicated interrelations of the history of information and the history of information science, chiefly proposed by Le Coadic, is discussed. It is suggested that the pursuit of the viewpoint on the history of information should contribute to formulation of a better interdisciplinary framework for the field of information science. Finally, a provisional model of the historical universe of information is described.

村主朋英*：愛知淑徳大学文学部図書館情報学科助教授

JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCE. Vol. 9, p. 57-76(July 1995)

1. 序論

1.1 研究の概要

本稿で用いる「情報史」という用語は、Norman D. Stevens [01] の提案に基づく特定の概念を示す訳語である。

Stevens論文の発行年は1986年であるが、情報史という語はそれ以前から定着していたと思わせるような印象を与えるかもしれない。とくに日本においては、初めてこの語を見てもさほど目新しさを感じさせず、どこかでそういった種類の歴史論がさかんに論じられているのではないかと印象すら与えるのではないか。「情報(化)社会論」に類する言説が普及し、すっかり大衆化しているために、情報に関わる用語が陳腐化しているためである。実際に日本においては、後述のように使用例の先例もある。

そうした事情にも関わらずStevensを情報史という用語の提案者とみなすのは、初めて情報学の術語として提唱したのがStevensである点と、彼が情報に関する学術研究全体を背景とした組織的な情報史研究を構想している点を評価したためである。

別稿 [02] では、このStevensの構想を掘り下げ、情報史を探求する研究領域の構築を目指して、情報史研究のための枠組みと実際に研究を進めるための戦略および方法論の検討を行なった。そこでは情報学の枠組みを歴史研究に適用することが情報史研究であると規定した。しかし情報学のあり方に関する議論は先送りした。

これに対して、以前に情報学の歴史に関わる年表 [03] を著した。その第一の目的は、情報学の研究と実務に関わる初学者のための教養を示すということであったが、同時に情報学の系統と環境要因を描出することも試みた。これは情報史構築のための第一段階という意図もあったが、総合的な情報史には至らない不十分なものであった。しかし一方、上述のように情報学全体が情報史研究の基盤として機能すると考えられるから、この年表の表現したような情報学

という分野の歴史そのものも、情報史にとって重要な意味を持つことが容易にわかる。

ここではこうした情報学の歴史について、「情報学史」という呼称を用い、基本的に情報史と区別する。本稿では第一に、この情報学史と情報史との関係を検討する。

さて日本では、津田良成が早くからStevens論文に注目しており [04]、さらに図書館・情報学の教科書にもまもなく導入された [05]。Stevensは論文の第1章末尾で、情報史の概念が“われわれの情報の研究に直接役立つことになり、情報についてのわれわれの考えに影響を与えることができるだろう” [01] との観測を述べ、情報史研究の情報学全体に対する意義を強調している。津田はこうした見解を評価し、情報史は情報に関する新しいアプローチであると解釈し、その学際的アプローチは情報学全体にも模範になると看做している。すなわち、単に歴史研究という枠にとどめない評価を与えている。このように情報史の概念は、情報学における新しい研究方法論と見なすことができる。

本稿では、こうした情報史研究と情報学全体との関係についても、さらに掘り下げたい。そして、情報史研究から情報学全体への貢献を増進する目的のもとで、情報史の歴史モデルの問題について探求する。

1.2 用語法に関する若干の指摘

1.2.1 日本語の語形

上述のように本稿では、情報史の概念をStevens [01] の提案に基づいて理解している。この範囲においては、「情報史」という日本語はStevensの用語the history of informationに対する訳語として成立した語である。しかし、最初から「情報史」という訳語が定着したわけではない。

上述のように日本において最も初期からStevensに着目していたのは、津田良成である [04] [05]。この当初は原綴のままか、あるいは

は直訳として「情報の歴史」という呼称も見られた。

そのころに「情報史」という語形を試用したことがある [06]。その際は先例を知らなかったために新たな造語として定義したが、もともと訳語である上、特異な造語方法ではないから、これ以前にもStevensを論ずる際に同様の語形を使用した例もあったかもしれない。その後、1992年に発表された日本語訳 [01] において情報史という語が用いられ、それにより情報学においてこの語形が正式に定着したと見てよからう。

一方、Stevensから離れて日本における用例を調べてみると、1973年に遡る「情報の歴史」および「情報史」という語のかなり古い先例がある [07]。1990年になると前者の語形を標題に用いた大部の年表 [08] も刊行されるが、本文中で後者の語形も使用されている。最近では情報史という語形を標題に用いたテキストブックも刊行されている [09]。いずれも [図書館] 情報学の動向と直接の関係が薄い文脈の用例であり、用法の典拠も不明だが、このことは逆に、情報史という語形が日本語においてあまり違和感を感じさせず、なじみやすいものであることを示していると考えられる。

さて、Norman D. Stevens [01] が the history of information という語を用いたとき、奇妙ななつかしさを覚えた人も多かったのではなかろうか。この語がもっと以前から使用されていてもおかしくなかったと思われるほどである。この語を歓迎するような潜在的なスペースが情報学研究者の知識体系にもともとあったことが想定できる。この語は、そのようなスペースを満たす概念のラベルとして受け入れられやすかったといえよう。日本語で「情報史」という簡潔な語形が採用されつつあることは、そのような親しみやすさに適していることの現れかもしれない。

「情報の歴史」という日本語は、あまりこなれていないし、両義的な印象を与える。「情報

に関する歴史」「情報に関わる歴史」「情報の視点から見た歴史」といったいくつかの微妙に異なる解釈を即座に生み出すが、一方でそれらは完全に矛盾するわけではない。

それに対して、「情報史」という語形は簡潔であり、安定感ゆえに既定の概念を示すという印象を与える。しかし、「情報の歴史」という語と同様の問題を内包していることにはかわりない。

使いやすい呼称の開発が概念の普及の第一歩だが、この場合、概念に曖昧さがあるため、通りのよい用語のために曖昧さが凍結・隠蔽される副次的効果があるし、これから多くの研究分野を巻き込んで構築すべき歴史概念に対して、既定の概念のような印象を与える語を安易に用いることは危険である。

用語の普及に関わりなく、この語の示す概念を入念に検討することが必要である。

1. 2. 2 Stevensの用語法

Stevensの用語法に関するこのほかの点を二つ、指摘しておく。

彼は原則として、この語に定冠詞theをつけ、単数形で用いている。不定冠詞を伴う例は、試論レベルの歴史叙述や個別の視点から見た歴史について語る文脈に限定されている。複数形は用いていない。

このことは、彼の歴史哲学的な考えを示すものと思われる。つまり、情報史は単一のものであるとStevensが考えている傍証と見なすことができる。あるいは、あくまで情報史は「学際的」なバラバラな状態ではなく統合された状態が理想であるという見識を示したものと見ることもできる。

同じ事柄に関してであっても幾通りもの異なる歴史叙述がありえるし、歴史認識は異なる歴史観により多様化する可能性を持つ。また、歴史研究については何通りかの系統やコミュニティが形成される可能性もあるはずである。しかし

彼は、少なくとも研究領域については統一された一個のものを考えているようだし、ある程度一般性のある歴史認識が生ずることを希望してこの論文を著したと推定できる。

さて、もう1点は相対的に軽微な問題である。

先に、日本語では「情報史」「情報の歴史」の二様の表記が見られると指摘したが、たとえばlibrary history (図書館史) という成語が普及していることからすれば、英語においてもinformation historyという表記が考えられる。

Paul Schneider [10] は学生の就職市場にあわせて図書館史教育を拡張しようというオランダの動向を紹介した際、その拡張形態を表す語としてthe history of information and documentationを用いた。この論文の第三者抄録(Dialog情報サービス中のHistorical Abstractsにより検索)ではinformation historyという語も見られる。Schneider自身も、IFLAの図書館史部門を「図書館・図書・情報史(Library, Book, and Information History)」という語を用いた名称に変更することを提案しており、英語の語感としてinformation historyという表記はさほど違和感がないのかもしれない。

これに対してStevensは一貫して、the history of informationを用いている。彼は歴史叙述の視点や原理ではなく対象の名称を冠した歴史を語る場合、一般にthe history of…と表記している。ただ1ヶ所で“in this stage of information history”(p.37) [01] というかたちでこれに反する箇所があり、同様の語法で、やはり1ヶ所でcommunication historyという表記も見られるが、いずれも(おそらくは単に語調ゆえの) 臨時の用法である。

この点は考え方よりも慣用の問題ではあるが、概念の普及とともにどのような語形で安定するかという点はターミノロジーの観点から注視する必要がある。

1.3 情報史という語の定義

情報史に期待されるのは、情報とそれに関わる種々の活動・機関・機器・手法の系譜、およびそれらの社会への影響といった事柄の歴史学的な説明である。しかしこうした点を一言で述べる定義はStevensも行っていない。彼自身もある意味で、情報史の概念を既定のわかりやすい概念と見なしていると思われる。

別稿では、出発点として、「情報史とは情報に関わる諸事象に関する歴史である」という素朴な定義を設定してみた。しかしこれでは単に言い換えに過ぎず、説明の力がない。そこで引き続いて、精緻な定義を求めてStevens論文中の記述を解釈し、接ぎ合わせることによって、定義を合成した [02]。

まず「情報を人類社会の歴史の展開における要因と考え、情報が社会の発達に与える影響に力点を置いてとらえた歴史」という第一の規定を引き出した。これは「あらゆる情報の問題を扱い、さらにそれらを人類の歴史の全体の中に位置付けて描く歴史」と言い替えることもできる。さらに「図書館学にとっての図書館史と同様のものとして、情報学に対しては情報史を構築すべきである」という第二の規定を合成した。

彼は、そうした研究がなされれば、情報による社会への貢献や文明の進歩・発展への影響がどのようなものであるか探求することが可能になると述べている。これは情報史研究という主題領域の全体的な研究目標と位置付けられる。また、このことにより、彼の企図は情報学における歴史研究領域の確立という方向に留らず、「人類社会の歴史に関して情報を鍵として描く」という大きな構想であると判断できる。こうなると、歴史学の一部門や世界史の各論といった捉え方では不適當であり、歴史全体の再解釈と見なす方がよい。

このような定義により、Stevensの構想については言い表すことができる。しかし情報史の説明としては、まず対象が不明確なことで、

「歴史」という語で示すものが不明確であることが問題として残る。たとえば、もともと歴史という語の用法は、過去の現実世界そのものを差したり史実の集まりを歴史と呼ぶ場合もあれば、特定の主観において構成された歴史認識という場合もあるし、あるいは歴史研究の分野のことを「～史」と通称することもあり、一定しない。英語のhistoryも同様の傾向がある。

そこで別稿 [02] では、とくにこの歴史という語の多義性を検討し、この語の用法を五つに分けた。「歴史認識としての情報史」は情報に関する歴史研究（「研究の行為としての情報史」）の成果として得られる。そうした研究を行う領域は「研究領域としての情報史」である。あるいは、そうした研究の対象としての歴史的現象（「探求の対象としての情報史」）が歴史認識を通して把握される。歴史認識は、「記述としての情報史」というかたちで記録される。

このうち、「記述としての情報史」と「探求の対象としての情報史」については特に名称を与えず、このほかの三つをそれぞれ順に、情報史・情報史研究・情報史研究領域と呼んで区別する用語法を採用した。本稿でも、この用語法の原則を受け継ぐ。

なお別稿においては、情報史よりも情報史研究を中心に論じている。そして情報史研究とは、情報現象を歴史的な観点から見ることであり、同時に歴史を情報（学）の観点から眺めることであると規定した。そして、そのような情報史研究を通じて得られる歴史像を情報史と規定した。

2. 情報史研究の境位

2.1 情報史の概念の多様性と多元性

別稿 [02] ではまず、情報史関連の既存の著作をグループ化した。つぎにStevensの情報史構想が目指している包括性および一貫性 (coherence) に照らして批判的に分析し、グループごとの重要性と問題点を挙げた。

まずコンピュータなど情報処理の技術あるいは装置・道具の歴史、および図書館を含む情報サービス機関の歴史は基本的な歴史概念であるが、情報に関わる諸現象のごく一部を強調するものであるし、現在のところは社会的文脈との相関を探求することが十分に行われていない。つぎに情報学や情報の実務に携わる者の形成する専門分野の歴史を識別できるが、これらは情報史の重要な一部分となるものの、全体の枠組みは示さない。三つ目のグループは日本における情報史の試みといえるものであるが、これらは情報学の文脈と無関係に成立したものがほとんどである。その一部はとりあげる問題が偏っている。一部は逆に情報関係のきわめて多様な事柄を扱っているものの、分析的な視点を欠いたまま包括しているため、描き出される歴史像が曖昧になっている。四つ目のグループは実績のあるコミュニケーション史である。情報史と同じ総合的な概念であるし、問題領域も類似している。かといって情報史をコミュニケーション史研究の伝統に吸収させてよいとは考えられない。コミュニケーション史自体が必ずしも安定した分野ではないからである。仮に合同させるとしても、人間の相互作用などのコミュニケーション現象にのみ焦点をあてるのではなく、情報メディアを通じた情報の流通や蓄積の過程に焦点を当てる情報学の視点の重要性を認識しておく必要がある。

このようにいくつものグループに分けられる原因は、情報史の概念の多様性（多義性）にあると考えることができる。しかし、これを多様性と考えるのではなく、一個の情報史の概念の多面性と捉え、積極的に評価したい。つまり、情報史を多元的・多面的な歴史概念と捉えたい。この点に関して次に詳論する。

2.2 情報史の諸側面

1.3節でまとめた用語法は、「歴史」という語に着目して整理したものである。しかし「情

報史」における情報という語の問題の方がより重要な問題を含んでいる。情報という語は情報史の範囲（あるいは対象）を示すからである。そこで、情報史の対象について検討しておこう。

Stevensは、情報史の定義をするかわりに情報の定義を入念に論じている。彼の考察は見方によっては単に曖昧さを増進しているだけに見えるかもしれないが、基本方針はより広い定義を志向するというものである。とくに、情報という語で示す対象が多様であるというだけでなく、「知らせること」（情報が伝達される過程や伝達に関わる活動・サービス）という動的な意味合いも含んでいるという点も指摘できる [02]。このような情報の定義付けは、情報史の対象についての説明でもある。こうした動的な捉え方が背景にあるため、Stevensの情報史を「伝達・蓄積・検索メカニズムの進歩ないし変化の歴史」と捉えることができる。

このように捉えると、対象としては情報伝達に関わる種々の活動・機関・機器、またそれらを支える手法・技法・方法・技術などが挙げられる。こうした対象は多くの種類にわたり、数量としても膨大な量になる。

しかしこのような情報史のとらえ方を敷衍して、「情報や情報の伝達・蓄積・検索システムが人類の歴史の展開に及ぼした影響に焦点をあてた歴史」と考えると、社会現象（政治・経済など人間の集団内・集団間の種々の関係による諸現象）や自然環境のあらゆる事象が対象になる。

さらに1.3節で示した最大限拡張した定義によれば、情報史を「情報を鍵として解釈・記述された人類の歴史」、すなわち、情報が人類の歴史全般に与えてきた影響を中心とした歴史記述ととらえることもできる。これは、歴史の主役（主体）と環境要因の関係が上記と逆転しており、いっそう多様な要素を考慮する必要がある。

さて、情報史という語に最初に接して、すぐに解釈を拡張して情報システムや情報サービス

に関する歴史を意味するものであると考えた人も多いだろう。Stevensの情報史概念の背景にある上述の情報概念を考慮すればこれはまずは妥当な解釈だろう。しかし、情報史という語に初めて接して、「情報に関する歴史とはどういった歴史なのか」という素朴な感想を抱く人もいるのではなからうか。情報という語を「伝達された内容」「意思決定に役立つしらせ」といった定義に即した素朴な語感で受け取ると、「情報史」とは民間の噂や政治・軍事的報告、あるいは科学的知識などが伝達されたり累積される様子を記述する歴史とも解釈できる。

これは一見すると滑稽な解釈ではあるが、こうした可能性も含め、情報に関わる諸現象を幅広く視野に入れなければ、情報史が単に情報システムや情報サービスの系譜をたどるだけの静的なものに陥る危険がある。このほか、情報に関わる概念・理論や研究方法論といった情報学に関する学術的事項も、後述のように「情報学史」の基本要素として、情報史にとっても重要なものであると考えられる。

Stevensの構想を受け継ぐには、こうした情報史の対象の多元性をどう理解すべきであるかという点を十全に考慮することが重要である。こうした多様な要素は、単一の観点で見渡すことが難しい。異なる複数の側面から交互に見ることによって見渡せるものと予想される。このことから、情報史研究においては多様な事物を網羅すればよいというだけでは済まない。これゆえに、情報史とは多面的なものであると本稿では考える。

多様性ではなく、多面性として捉える考え方には、どんなものがあるか。

情報学の歴史に関する筆者の年表 [03] では、項目の配置として「情報サービス・情報源」「情報専門家・専門家組織」を中核とし、すぐ脇に「情報の理論や基礎研究の動向」および「情報管理の技術・技法」を配置し、さらにそのまわりに「哲学・関連科学分野」「基盤技術（いわゆる情報通信技術）」「一般社会の動向」

を配置した。これ自体は情報学史の年表に用いた項目であるが、環境要因も含めた年表であるから、情報史の諸側面に関しても示唆しているものと見なすことも出来る。

一方Stevensは、情報史研究において通時的にたどるべきテーマとして、リテラシー、知識の組織化、情報の経済学、情報の提供に関わる機関、管理と自由の問題という五つを挙げ、個別に論じている。これらは彼の識別した情報史の側面ともいえる。

さらに別稿では、情報史に関わる既存の著作の批判的分析から、情報史が扱うべき五つの側面を識別した [02]。

- A：情報を扱うシステム（道具・方法・技術・機関）
- B：情報に関する考え方・概念・理論（＝情報学史）
- C：人間や集団の相互作用
- D：人類の社会・文化および自然環境
- E：人類が伝達・蓄積・継承してきた知識

Stevensや筆者の挙げているこうした諸側面についてはまだ検討の余地があるが、これらのリストを見れば、単に要素の多様性（多元性）を示すものではなく、多様な観点を導入し、併用して情報史をながめること、すなわち学際的な探求を進めることが必要であることがあらためてわかる。しかし、多様な観点を導入すれば、必然的にそうした観点の相互の調整が必要となる。そして、こうした対象を研究する情報史研究の枠組みは、対象の多面性と観点の多様性を意識して厳密に精緻化する必要がある。

2.3 情報史研究の抱える問題

こうした情報史の多面性もしくは情報史研究の学際性を考慮した上で生産的な研究領域を形成するには、いくつか解決すべき問題がある。別稿を受けて、情報史に関するこうした基本問題について論考を継続するのが本稿の目的である。

既存の著作の批判的検討をもとに、情報史の探求は情報に関する理解やアプローチの質が問われることを指摘した。結局、情報史の枠組み形成の作業は、情報学の基礎研究（情報現象に関する枠組みや観点の形成）と等しいか、少なくとも連動して進める必要がある。しかし、多元的・多面的な特質を持つ歴史の探求はどう展開すればよいだろうか。

まず、情報学の枠組みとか観点といった議論を進める前に、そもそも情報学とは何かという根本問題を解決する必要がある。この点に関して3章で検討する。

また、もう1点、情報学史と情報史という二つの概念の関係という問題がある。情報学史は「情報学とは」という問題に回答を与えるとともに、それ自体が情報史の中で重要な位置を占めるものと考えられるが、実際にどのような機能を果たすかという点を考究しておきたい。この点は4章でふれる。

その上で、情報史研究の枠組みの確立へ向けの方策を検討する。

3. 情報学の状況と情報史

3.1 情報学のアイデンティティ

別稿の論考においてキーポイントとなったのは、歴史観の問題であった。情報史研究領域固有の歴史観を形成することが情報史研究の活発化と組織化に寄与するだろうとの考えが背景にある。

ただ、固定的なイメージを歴史に投影し、恣意的な解釈を行なうことによって歴史認識を統制するようなイデオロギイ的歴史観では学術研究の基盤としては望ましくない。

そこで、北川敏男 [11] の提案した「情報史観」の概念に着目した。彼のいう情報史観とは、彼の提唱していた情報科学の枠組み（考え）を歴史研究に適用（投影）することによって得られる（情報科学的な）歴史像である。あるいは、情報科学の観点から歴史を眺めて得られる歴史

像である。

こうした着想は本質的に彼の情報科学構想に依存するものではない。そこで別稿では、情報学に引き寄せ、「情報史研究とは、歴史を情報(学)の観点から眺めることである」という規定を試みた。「情報学の眼差しを歴史に投げかけること」という言い方もできるが、もっと厳密に、「情報学の概念・理論および関心事項を基礎にして、史料を分析・解釈し、歴史像を形成する行為」というような規定が妥当だろう。

しかし、情報史研究の基盤とすべき「情報学」とは一体何を差すのかという問題が残っている。情報学という名称を持つ一定の伝統を有する分野はあるが、他方、日本ではそれとは異なる伝統で情報科学という分野名も流布している。

別稿では、「情報学というものが既に確立されていて、その上で情報史とが連携する」という考え方をとっていない。實際上、情報に関して考えの異なった研究者が情報史研究領域で共存する事態が予想されるため、むしろ情報史研究という場で相互の見解を交換し、それを通して、情報学全体の整備に寄与するとの戦略を提唱した。つまり、「情報学とは」という問題を保留し、むしろ多様な考えをまず投影してみることを推奨した。

しかし、一度ここで、情報の研究領域はどのように構成されている(されるべきである)かという根本問題を論じておくことが有効だろう。上で用いた「情報学の眼差しを歴史に投げかける」という言い回しをとれば、この問題は「眼差しの主体が誰か」というアイデンティティの問題である。またそれはどんな視点でものを見ているのか。

まずこの分野に関する基本事項を確認する。

3.2 情報学と情報科学

3.2.1 情報学の系統

筆者は、情報学に関して、図書館学・ドキュメンテーションからの発達段階を経てきた分野

であるとの捉え方に則っている [03]。この分野が情報に関する科学として最適なものかどうかは議論の余地もあろうが、この年表によって示したように、研究および実務の実績を識別できる。また、テキストブック [12] [13] で示されるように、一個の分野(ディシプリン)としての歴史および知的な体系を有する。

基本的に図書館学に起源があるとはいっても、その他の領域の要素が随時導入されてきたし、またいったん情報学という名を得ると、出自を離れて一般化を志向していった経緯がある。その志向が推し進められることにより、情報という用語を用いはじめている数多くの異分野と出会うことになる。とくに、通信や制御に関する工学や数理的な領域の系統の情報概念はもともと情報学という名称が考案される契機となった [14] ものだから、そうした分野は重要な存在であるが、今日ではそれ以外にも、認知科学や哲学等の強力な諸分野との接触が生じているし、多方面に眼を配る必要性が増大している。

そうした情報に関して何らかの探求を行っている主題領域をまたいで、学際的な相互作用の中で情報研究を考えるという着想が登場して久しい [15] [16]。しかし、そろそろ距離をおいた遠慮がちな交流ではなく、統合の道筋を進んでよいのではないか。

Machlupら [15] は関連主題領域としてそれ自体が学際領域とみなされるものも含めて多様な領域を列挙している。これらの諸分野は研究対象よりもアプローチ方法や枠組み自体が大きく異なっているが、そうした異質さを超えて寄り集まることが情報の包括的な研究に対して大きく貢献すると指摘されている。しかし、情報関連の主題を扱っているという共通項だけで諸分野を集め、学際分野として情報学を形成しようとしても、限界がある。

そこでMachlupは同書の中で、各分野の情報に関わる部分を接ぎ合わせた学際的な「広義の情報学」に加え、コンピュータ科学および図書館学の系統からの「情報学」形成への動きを批

判的に検討し、それらに対して、ほかの分野に従属しない第4の可能性として「狭義の情報学」を論じた。この狭義の情報学とは、研究者間コミュニケーション、情報交換の方法、情報システムおよび情報ネットワークのモデル構築といった一連の主題を共有する問題志向の領域として規定されている。狭義の情報学は、専門機関や専門雑誌などを基盤に、目的を共有する単一のコミュニティもしくはコミュニケーション空間を形成することで成立し、特定の分野に依存せず、学際性を保ったままコミュニティを維持すべきだというアイデアである。

現在の情報学は、これに類するプログラムに概ね従って進行し、とくに人間に関する研究という趣旨を強めながら体制化が進められているものと見ておきたいが、とくに日本においては、こうした動きとも切り離された動向がある。

3.2.2 informatiqueと日本における情報科学

日本では、図書館学や図書館情報学の流れて情報学という名称を用いる研究者のコミュニティに対して、やはり情報に関する研究分野を意味する「情報科学」という語を用いる集団がある。この語の英訳にはcomputer science(s)かinformaticsが当てられるのが通例である。教育機関の名称としてさかんに用いられている[17][18]が、範囲は一定しない。Machlupら[15]の用語でいう「第2の意味での情報学、computer and information science」に近いものに収束する場合が多いとだけ指摘できる。

この情報科学の類義語のうち、もっと明確な形で唱えられているのがフランスで唱えられたinformatiqueである。「情報科学」に対して英語でinformaticsとあてる者は、この系統を典拠としているのだろう。この語を用いた包括的な歴史も著されている[19]が、計算機の歴史や、計算理論やシャノンの通信理論に集中している。

これに対して、日本で「情報科学」が提唱された初期には、北川敏男のように自然科学のみならず社会科学をも含む学際科学とみなす考えがあった[20][21]。彼は情報概念を中核に社会科学を統合しようとする「情報社会科学」構想も行い[22]、そのような学際科学の中核となる「情報学」という分野の構想も行っている[23]。

このような構想は現在は縮小されたかたちで受け継がれている。坂井ら[24]は情報科学の基礎に関する3年におよぶ研究プロジェクトの成果として、計算モデル等の数理的理論を頂点に据え、以下、コンピュータによる情報処理に関わる基礎的な事項から個別のデータ処理技法へと展開し、裾野に応用分野として各種工学やOA・FAを配置するという図式を示している。これは、informatiqueと近い範囲に落ち着いている。

しかし一方、近年、情報をキーワードとする学際的な教育機関の創設が増え、コンピュータ以外のトピックへの着目がなされたり、情報に関するより根本的な基礎科学への希求も現れはじめている。情報の問題といえばコンピュータあるいはマスコミといった旧来の即物的な連想はずたれつつあるようである。

だが多くは情報現象を探求するというより、他分野に情報という概念を導入して活性化を図ったり、そうした分野を集める際の共通項として、いわば接着剤として漠然と用いる傾向にある。この発想は、かつての北川敏男の周辺での試みにも見られたものだが、より広範囲の領域を巻き込んでいる。したがって、バラバラの状態といっても情報に関する興味深い知見が随所から提示される可能性が高まったといえる。しかし、依然として情報という対象を多面的に探求する目標の達成に取り組む機構には転化しにくいのではないか。

そこで、「情報科学」系統も含めて情報研究の範囲や枠組みを再検討し、情報に関する研究の多様化・学際化ならぬ単なる「多極化」とい

う事態を防ぐ手段が必要である。

3.3 求心性という問題

学際という語は、「国際交流」といった語に似てキャッチフレーズとしての色彩が強いし、また曖昧である。情報学の学際化と呼ばれる傾向に関しては、文字どおり異なる分野が交流するという場面よりは、情報学以外の諸分野への情報の概念の普及と、情報学へのそうした分野の概念・理論・方法論の流入を差したものと理解すべきである。全体としてのアイデンティティを失うまでに情報学の範囲を漠々と拡げることが求められると見なす必要はないし、共通領域を作り、求心力を維持することが有用だろう。

再び、Machlupの着想に戻ってみよう。彼のいう狭義の情報学とは、結局、たとえば上記のようなテキストブックを共有し、学会としてthe American Society for Information Scienceにたえず注目し、レビュー誌としてAnnual Review of Information Science and Technologyを共有するといった規準を設計して同定することができるようなコミュニティによって成立する領域であるといつてよいと思われる。これが実体として同定できるものなら、彼のアイディアを実現するための基盤となる。もちろん、こうしたコミュニティの図書館学への依存性を再検討し、拡張の方向を含め、領域の構成を再検討する作業はいずれにしても必要である。

一方、少なくとも広範囲にわたる対象を包括的に扱うには、多くの領域の助力は必要だから、依然として広義の情報学という仕掛けも必要である。

このように、狭義のものを強化し、広義のものとの二重構造をなすという方策が望ましいのではないか。

ただ、狭義と広義という図式では、どうしても「中核と周辺」という色分けで分野間の差別を行なうことになりがちである。情報に関心を持つ者に凝集志向と拡大志向とがあり、それが

分野に求心力と遠心力の緊張と均衡を与えるものだと見るべきである。そして凝集志向の一派が上記のような規準で識別でき、また活動基盤として図書館情報学という名を持つ研究教育機関に依っていると見るべきではないか。拡大志向は、名称の上では、引き続き他の分野に属しつつ情報に関して知見を提示する者が主導する志向だと考えられる。

そうした中で、凝集志向の一派の使命は、自分たちが中枢であると主張することではない。図書館学を背景として長く維持されてきたため、情報学の成立までの伝統を知っている点を主張すべきである。さらに、情報概念の探求について特にこのコミュニティで厳密かつ分析的な業績が蓄積されたことも誇ってよい。そうした特質を背景に、伝統(=情報学史)に関する理解を普及し、また諸分野の間を調整し、連合の要となるという責任があるのではないか。

「情報学がどのような知識体系あるいは知的機構であるべきか」という問題についてはまだ長い探求が必要になりそうである。しかし、「誰が情報学を担うべきか」、あるいは上記の「情報史の眼差しの主体は誰か」という問題については、以上の議論も鑑みて方策を煮詰めれば、意外に早く解決策が得られると期待される。

3.4 この問題に対する情報史の役割

こうした問題は、本稿の範囲を越えて、情報学(あるいは情報に関わる諸分野)の共通の課題であるが、情報学のあり方が情報史研究を進める上で最も基本的な問題となるのだから、情報史のためにもこうした議論を続ける必要がある。

一方、情報史研究を進めることにより、逆に情報学全体の枠組みの形成に寄与するという可能性を別稿で示した。このほか、情報史自体が学際的な研究環境下で進める必要があるため、その意味で学際性の問題の解決のためのひな形となりうるし、また情報史研究の成果から情報

学の基本問題に貢献できる場合もあるだろう。

さらに、情報史の中でも、情報学史（情報学の歴史）という歴史概念は直接、情報学のアイデンティティの問題に寄与する。とくに、情報学を取り巻く研究者や実務家に関わる出来事を追うだけでなく、情報や情報学に関する考え方（概念や視点、枠組み）を探求することによって、情報学史は情報学における基礎研究の重要な方法ともなる。

この情報学史は当然のことながら、情報史の関連概念であるから、情報史は情報学の枠組みに依存するものの、逆に種々の仕掛けにより自らの基盤である情報学全体に寄与することができるわけである。

このように、情報史研究と情報学全体とは多重に寄与し合う関係があるといえる。この情報学史と情報史の関係については、まだ検討の余地があるので、次章で続ける。

4. 情報史に対する情報学史の役割

4.1 情報史は情報学史と等しいか

さて、情報学史が情報学のアイデンティティという問題に寄与すると主張したが、この情報学史のあり方および位置付けについて、掘り下げた議論を続けたい。

そもそも、「情報史とは何に関する歴史か」という問題について捉え方が二通りある。

- (1) 情報史とは情報学に関する歴史である
- (2) 情報史とは情報に関わる諸現象すべてに関する歴史である

前者は、情報学の歴史あるいは情報サービスの歴史を志向するものであり、本稿で情報学史という呼称を与えているものである。もちろん、純粋に情報学という分野の内部事情だけを記述した歴史を情報史とは誰も思わないだろうが、情報学・情報サービスを主体とし、その環境要因についてもふれるという構成の情報学史ならば、情報史と呼んでもよいのかもしれない。しかし、あくまで情報学という分野を中心に据え

た捉え方であり、それでよいのかという疑問は残る。

それに対して、後者のとらえ方では、情報に関わるものすべてが対象となるわけだが、この世の中の全ての現象（または存在）が何らかのかたちで情報に関わるといえようから、うまく組織化しなければ一般の歴史ととくに区別する必要がないものとなるだろうし、研究対象が多く複雑に関係しあっていて収拾がつかない（一貫性のない）状態になる危険が予想される。

情報学史は情報史の一側面であるとの理解を2章で示したが、単純に情報学史が情報史の下位概念であるわけではなさそうである。情報学史研究は、情報史研究全体の体制に深く関わる中枢的な因子となる可能性も含め、検討する必要がある。

このように、問題の構造は複雑である。この関係はどう理解すべきだろうか。

4.2 情報学史の概念

4.2.1 情報学史の基本概念

情報学史とは、「情報学の研究者が自分の所属する情報学の過去と現在の態様を知り、その構造と特質、あるいは任務・使命を検証すること」と定義できる。この情報学史の概念については、別稿 [02] でも詳述した。

情報学史の範囲のうち、技術や実務、および学協会活動を中心とした専門家集団の歴史の重要性については言うに及ばないだろう。これについてはとくに古参研究者への聞き取り調査を含む記録の作成と史料の編纂といった努力の累積が期待される。しかし、より重要で困難なものは、理論面の歴史である。

Shera [14] の古典的論文では、情報学成立の初期段階までの専門集団の系譜に引き続いて、情報の基礎研究のレビューが述べられている。Machlupらの編集した著作 [15] は、いわゆる情報学以外にも含む情報研究に関わる諸領域の学術的な系譜が示された。しかし前者は時期的な

制約もあって概念や理論の歴史として十分であるとは認められないし、後者も基本は論争の書であるから歴史的記述の面は弱い。

ドキュメンテーションから情報学へという分野の組織変更に伴う議論に端を発する「情報学とは何か」という議論は、情報学史の研究領域としては開花せず、「情報とは何か」（あるいは情報に関する考え方・枠組み）という問題と連動して扱われ [25] [26], Belkinの情報概念の包括的な分析 [27] を生み出した。しかしその後1980年代を通じて展開された, Dervin [28] を始めとした情報学の基本的考えに対する再検討においては、「批判すべき旧来の考えに対するレビュー」といった姿勢が基本である以上、歴史の探求に価値はあまり見いだされなかったものと考えられる。

これに対して, Ingwesen [29] [30] においては情報学史の包括的な記述の後に自己の考えを展開するという戦術が採用されているが、議論展開の重要な方法としての情報学史の意義が見いだされるだけでなく、概念・理論に集約した情報学史の範例としても認めることができる。

以前筆者は、概念・理論に集約した情報学史について「情報学思想史」という語を提案した [06]。このような情報学思想史とは、情報学史の一部分であるとともに「情報思想史」の下位概念と考えることもできる。情報学の文脈から離れて展開されている情報や知識に関する議論をリンクすることも必要だから、このような階層的概念を検討しておくことは意味がある。別稿では、情報思想史・情報学思想史の探求の情報史研究全体に対する意義についても論じた [02]。

つぎに、こうした情報学史・情報学思想史に近いアイデアを提唱し、そのあり方や実現のための構想を述べているフランスの論者に言及する。

4.2.2 Le Coadicの構想

Le Coadic [31] は、本稿でいう情報学史について、むしろここで考えている情報史のような総合的な歴史の概念としてとらえ、構想を述べている。彼の論文のタイトル原文は“Histoire de la science de l'information”であり、「情報学史」と短縮して訳すか、原文の響きを活かして「情報の科学に関する歴史」とすることもできるが、「情報学に関する科学史」とも解釈できる。というのは、論文冒頭で科学史の概念が論じられているからである。

科学史は現代の科学的問題を解決するというよりは記録（記憶）の機能を果たし、科学理論の展開に際して過去のアイデアを再発見できる宝物庫となり、また方法論や理論を再検討する手段となる。彼はこうした理解のもとで、さらに科学史研究一般の動向を参考に、情報学の歴史において理論・概念の発達、社会文化的文脈、科学知識の生産における社会学的側面の探求が重要だと述べる。情報学の歴史は、そのような規準を満たす水準を目指すべきだというのがLe Coadicの主張である。

さて彼は、情報学の歴史を構成する基本的な（素朴な）歴史概念を識別した。

- (1) 諸機関の歴史
 - (a) 図書館史, ドキュメンテーションセンターの歴史
 - (b) 図書館組織内部の出来事に関する歴史
 - (c) 情報・ドキュメンテーション関係の専門協会の歴史
- (2) 媒体技術の歴史
 - (a) 図書・印刷の歴史
 - (b) データベースの歴史
- (3) 研究者等の重要な個人の歴史

これに対して、以下は「情報の歴史 (des histoires de l'information)」というラベルで大まかに一括されている。

- (4) 情報理論の歴史 (シャノン/ウィーナー流の数学理論や情報処理技術の歴史)

(5) ドキュメンテーション史および情報（サービス・流通過程）の歴史

こうした歴史概念の著作は、情報学の歴史（情報に関する科学についての科学史）の名に見合う概念・理論の歴史となっていない、と彼はいう。そしてこれらに対して、情報学および情報技術の歴史（上記②と異なり、検索システム等応用技術の歴史）の概念を例示的に説明している（pertinenceの概念の展開が事例として用いられている）。

Le Coadicの議論はアイデアの提示というレベルであるが、彼の挙げた個別の歴史概念は2.2節で挙げた情報史の諸側面と重なる部分があるし、またLe Coadicが情報学史の最も重要な側面として重視している情報の概念・理論の歴史は、Stevensも同じく重視するものである。すなわち、Stevens論文の定義の部分でも（情報という語の定義や用法についての研究を）“総合的に行うことは、一般的な研究領域としての情報史の研究基盤を確立することにつながる”[02]と述べられており、Stevensの情報史構想においても重要な基盤に位置づけられている。

Le Coadicにおいては、それら個別の歴史概念はあくまで「情報学史の」構築のための基盤として理解されており、Stevensの考えるような情報史の発想は見られない。これはどういうことを意味するのだろうか。単に彼の視野が狭く、情報史の意義を考慮していないからなのか。しかし、これはむしろ情報学史の特質・構造および意義に関する見識を提示しているものと評価した方がよさそう。

そこで彼のアイデアを評価し、Stevensの構想に組合せてみよう。すなわち、二人の構想を合成すれば、情報学史とは情報史の各論もしくは一側面ではなく情報史に匹敵する多面的探求を要するサブセットであり、また情報史の中核となる情報の概念・理論の歴史の探求を担当する重要な役割を担うことになる。

こうした帰結をも参考にしながら、つぎに情

報学史と情報史・情報学の関係について言及する。

4.3 情報学史の情報史に対する位置付けと役割

Le Coadicにならって、科学史の言説を参照してみよう。

村上陽一郎[32]は、パラダイム論をはじめとする科学哲学の考え方を背景に、歴史の概念も問い直しながら、科学史の方法論を検討している。その中で彼は、科学史研究において、過去の状況が現在の「われわれ」（科学史を探求する主体）の知識の中に重層しているとの考えを示している。そして、「われわれ」から過去を切り離し、現代の視点で過去を意味付けするのではなく、過去の全体をそれ自体として理解することにより、逆にそこに「われわれ」の知識や観点の中に重層している歴史的要素が順に明らかにされると指摘している。このように考えると、科学史は個人の全人格的な営為であることになり、学問領域を形成することができないのではないかと結論が示されている。

筆者は、情報学史研究は、情報史研究、さらには情報学という学術分野の下位領域であるとの考えを捨て切れない。したがって、十分に村上の示唆を反映して進むことはできないが、これに触発されるかたちで、ここまでの探求を辿ってみる。

情報史とは「情報学の視点からの歴史である」との解釈ができる。つまり情報学が情報に関する知見の全体を用いて歴史を探求することである。歴史に対して眼差しを投げかけることによって情報史を探求する主体は、情報学（＝「われわれ」情報学研究者）である。

眼差しの主体である情報学（われわれ）とはどのような存在であるのか、というアイデンティティの問題は、今度は情報学史の課題である。

一方、情報学史は、情報史に対してどのような関係であるか。ここで、この問題について小

さな仮説を設定してみよう。

- (1) 情報学史とは、情報学による情報学のための情報学に関する歴史である

これは、対象として情報学の環境要因も含むように注文をつければ、だいたい正しいと言える。しかし、次のものはどうだろうか。

- (2) 情報史とは、情報学による情報学のための情報学に関する歴史である

「情報史とは情報学の視点から見た歴史」という考えを採用したから、「情報学による」という部分はよい。それに対して、Stevensの構想にしたがうかぎり、「情報学のため」だけではなく、一般の知識・教養にも寄与するはずである。そして、情報史の対象は、情報学という領域の問題ももちろん含まれるが、そこには留らず、一般の情報流通過程も視野に収める必要がある。

こうしたことから、情報学の歴史と情報史とは同じものであると見ることはできないが、情報学史が情報史の一部であるということはまず認めてよいだろう。しかし、それだけの関係で済むのだろうか。

情報学研究者は、情報学の立場から情報の問題を中心に世界を見る者といえる。しかし、理論や技術・実務の先端の動向を常に把握する必要から、世界の中で、とくに情報学の動向に眼を配ることになる。世界全体と、その中の現象の一つである情報学は、明らかに異なる。

しかし、眼差しを投げかける主体は同一であるし、どちらに対する関心も同一の源を持つものではなかろうか。これは、情報の概念の探求が情報学という分野の歴史と密接に絡められるかたちで論じられてきた [25] [26] こと等によって根拠づけることができる。これらの関心の方向に違いがあるとすれば、Machlupのいう狭義の情報学と広義の情報学の方向性(凝集志向と拡張志向)に類比できるものかもしれない。

以上をまとめると、情報学自体は情報史の対象の一部であるから、情報学史は情報史の一部門でもある。ところが、情報学史は情報史を見

ようとする情報学自身を明らかにする営為でもある。さらに、情報学自身への眼差しと情報に関わる諸現象への眼差しは同根である。こうしたクラインの壺のような、自己言及的 (recursive) な関係が情報学史と情報史の間にある。

こうしたことから、情報学史だけで情報史の全体を構成することはできないが、情報学史研究は情報史研究が存立するための基盤と柱とに關与する最重要の因子であるといえる。

5. 情報史の歴史観と情報学の統合

5.1 統合への方策

5.1.1 情報史研究の学際性

Stevens [01] は、図書館史・コンピュータ史・書物史・コミュニケーション史等を統合し、さらに人類学・一般の歴史学・社会学等の分野の研究成果を巻き込むことによって情報史研究領域という統一分野が形成されるものと考えている。そうした個別分野の成果を糾合したのち、情報史研究領域という専門の分野で成果を蓄積することを彼は望んでいる。

ただ、情報史の学際性とは、「利用する知識の領域が複数ある」だけではなく、これから行なう研究も学際的なものとしなければ、縮退に向うだけであろう。このような情報史研究領域を成立させ、また活性化する方策を別稿 [02] であわせて考えた。

情報史研究は情報学の枠組みを歴史に適用するものであり、その情報学の枠組みがまだ発達途上であるとの認識を以上で示したが、かといって情報に関する学問分野が統一され、情報に関する統合的な枠組みが形成されるのを待ってから情報史研究を開始するというわけにもいかない。個別の歴史研究や歴史の叙述を累積していくことが急務である。むしろ情報学全体の枠組みの形成と連携しあいながら、情報史の枠組みの形成を進めるのがよからう。

情報史研究に巻き込まれる個別の研究者は、情報に関して、どのような立場をとっていても

構わない、というのが別稿で論じた情報史研究領域のとるべき基本方針である。偏った視点であっても、歴史研究という共通の場に成果を置いてほかの研究者と接触すれば、直接的に情報に関する議論によって接触するよりも、うまく議論ができるだろう。歴史研究では、具体的な事例を対象とするため、より議論の接点を見いだしやすいからである。

なお、情報史研究領域という場で接触し合うのは、個別の研究者の持つ情報に関する観点や枠組みといったものではない。そうした観点・枠組みによって見える歴史（歴史像）が接触するわけである。

こうした中で、「様々なものの見方がある」と鷹揚に構え、まったく噛み合わない議論を続けるような学際性では、なかなか一貫性のある研究領域が形成されない。とはいえ、性急な統合化が効果を持たないことは容易に推察できる。

個別の独自性を侵襲しないかたちで多様な観点を収束させることができるような、多面性を反映する枠組みが理想ではなかろうか。もともと別の側面を別の視点や立場で眺めた研究どうしを直接に対照しても、議論は噛み合わない。

そうした超越的な枠組みは、たとえば上述したような情報史の諸側面を網羅するものがよいものと思われる。とくに筆者の示した情報史の五つの側面は、多様な観点を導入し併用しなければ、十全に論ずることはできず、まさに「一面的な」議論になる。そしてそのような五つの側面を示す概念を精緻化し、情報に関する枠組みとして構成すれば、多様な観点を吸収する緩衝帯として機能すると考えられる。

緩衝帯という語を用いたが、単なる利害調整目的のような枠組みでは、統合のための用はなさない。一貫性を保証する機構を考案する必要がある。

5.1.2 情報史の歴史観と情報学の世界観

情報史研究とは、情報学の枠組みを歴史研究

に適用し、歴史像あるいは歴史観を得る営為である。この歴史観の概念は、時間軸方向に展開された世界観と言い換えることができる。この仮定をやや乱暴に整理すれば、情報史の歴史観は、情報学の世界観と等しいか、あるいは密接な関係を有することになる。

世界観および歴史観はそれぞれ世界および歴史に関する像である。ここでの議論はあくまで学術研究の文脈だから、そうした像を見いだす主体は、何らかの学術的な枠組み（体系的な知見）である。学術的な枠組みであれば、世界像・歴史像に関する一般モデルを見いだすことができる。そうしたモデルは、「予め用意された典型」であり、実際に適用されることによりフィードバックを受けて、修正されることがある。

さて、情報学や情報史に関係する個別の立場から見た世界像・歴史像はともかく、超越的な枠組みによって見える多面的な世界像・歴史像とはどのようなものであろうか。

前章では、情報史研究とは情報学史研究との多重な関係に支えられた機構を持つとの考えを導いたが、さらにこの機構の運動を歴史像・世界像の探求に振り向けることにより、個別の歴史像・世界像を越えて、学際的な情報史研究ないし情報学全体のための多面的な世界観が形成されるだろう。こうした世界観に依存することによって、学際性の利益を享受しながら領域の統合をはかることができるのではなかろうか。

理論的な仕掛けの精緻化の作業は様々な方法で行なうことができる。こうした世界観を目指し、それを実現するようにモデルを作るというアプローチもその中の一つであるが、筆者は当面、その可能性に専念して追究したい。

以下では、こうしたプログラムに沿って、この問題の試論を行なう。

5.2 考慮しておきたい事柄

とくに情報科学を名乗る立場に、情報現象そのものよりも情報を扱うメカニズムに焦点があ

る論者が多いように思われる。そうした目的の場合、情報現象に対してはなるべく一般的な規定を行うか、一般的なカテゴリ化を行なうことが好ましいものと思われる。

しかし情報を歴史的な事象として扱う場合、まず「情報一般」という捉え方は好ましくない。社会における情報の発生・流通ないし蓄積といった現象を考究するなら、人間、ことにその文化との関係が最も重要な属性となる。その範囲では、情報はつねに、「ある時点で何者かが」引き起こした現象であるはずである。換言すれば、情報は人類の歴史の中で生じる現象であるわけである。

こうした範囲では、情報の生産・伝達・利用といった現象は、社会・歴史的な特定の状況の中で生じる現象である。これにまつわる人間活動は、酸素を吸って二酸化炭素を吐き出すような活動ではない。情報現象はランダムに生成される文字列ではなく、科学・理論・論理・感覚・信仰といった基準や目的に照らして意味を持つものだけが生成されると考えられる。

アルゼンチンの作家ボルヘス (Jorge Luis Borges) [33] は、言語・記号系から生成可能な記号列すべてが網羅された、論理的に無限の規模を持つ図書館である「バベルの図書館」というものを仮想した。しかし、情報の歴史的な探求において、このようなものを問題とすべきではない。まさに今までに生み出され、社会的・歴史的な現象の展開の中で今後、生み出される可能性があるものだけでよい。

また、状況(文脈)には個別の構造があり、かつ不断に変化する。ここで考えている文脈とは、個人・組織・分野・共同体・コンピュータシステムといった種々の情報処理系の持つ知識構造、もしくは世界である。

石沢篤郎 [34] は、歴史の概念と結び付けて情報の概念を考え直す試論を行なっているが、まず情報の概念がコンピュータ上のデータという概念と分ち難いとの指摘から、唯物史観の立場に立脚して批判を展開したものである。つ

まり、歴史性といってもその考え方の枠組みを反映した意味合いであって、上記の歴史性とは異なる。

さて、ここでは情報学の通常の用語に置き換えながら、彼の情報に関する考えをまとめよう。「情報現象の実体はコミュニケーションであり、情報は人と人とを媒介する関係であるが、その際に用いられる記号等の表現形式が過度に重視されることによって物象化された情報の概念が生じる」という趣旨のものである。これはむしろ、まったく文脈の異なる最近の「図書館」情報学における議論(たとえば糸賀 [35])に通ずる考えである。

詳論は稿を改めたいが、筆者個人はそうした考えを考慮した上で、それでもなお、心理的・主観的な仮想的実体(虚体とでも呼ぼうか)として情報の概念を捉える立場をとっている。そうした仮想的実体の構造は認知構造とコミュニケーション過程を構成する種々の物質的基盤、とくに情報メディアの構造との相互作用の上で生じると考えられるから、論理的にはコミュニケーションの動的な過程に含まれる一部分と見ることが妥当だろうが、一方で認知の主体にとっては、そうした過程で一つ一つの物質構造を認知するのではなく、むしろ「情報という実体が出てくる」「情報が社会に蓄積されて、そこかしこに実在する」という印象を受けているものと思われる。そして実際に、この過程に関連する物質的・論理的構造をいくぶんか反映するだろう。

こうした点を筆者は重視したい。

真の意味で情報および知識に関わる歴史概念を追究するならば、実際にコミュニケーション過程が物質的・社会的にどのように構成されるかという議論で終えず、それらを実際に担う個人(あるいはその他の認知の主体)がどのように「感ずるか」という主観的側面をも盛り込んだ方がよいのではないかと思われるのである。

筆者が情報史の側面として、コミュニケーション過程と並べて、Popperの提唱した意味合い

[36]での客観的知識の概念を置いているのは、こうした考えからである。

5.3 情報史に関する仮設的な歴史空間モデル

5.3.1 背景

素朴に考えられるように、人類の歴史の諸要素の中で、情報サービスや情報システムに焦点をあてるという図式の情報史では、通常の歴史概念と異なるものにはなるまい。従来の枠組みでも、たとえば印刷術やコンピュータの出現が歴史的イベントとして十二分に意識されてきたはずである。これで情報の問題が片付くならば、あえて情報史という新しい概念を提唱する必然性がなくなる。

コミュニケーション過程のみならず、情報という現象を何らかのかたちで歴史世界の中に組み込むことができれば、新しい歴史概念というにふさわしくなろう。しかしそれには、視点の転換が必要である。かといって、歴史世界の中に、物質的過程と別の異質なものとして情報という要素を唐突に挿入することは、整合性を失わせるだけである。

情報学のものの見方を背景にして、情報現象が立ち現れることができるような歴史モデルが必要である。極端なかたちでは、吉田民人 [37] [38] が目指すような、構造とかパターンの概念をもとにした、宇宙像の包括的な転換にいたってもよいと考えたい。吉田は、情報に関する学問を成立させるには、諸科学を巻き込んで全体においてパラダイム転換を起こす必要があるとまで考えているようである [39]。この考えを支持するなら、日常の世界観や自然科学の宇宙観と離反してもよいではないか。

一つの解決策は、コミュニケーション史の概念を追究し、人間や組織の間の相互作用を中心に歴史記述を行い、それによって情報の問題を説明する方法である。おそらくこれが有力な案であり、ここでの目的も満たす力はあると推定できる。

ただ、筆者は対案として、認知の主体が主観的に感ずる仮想的実体をも歴史の構成要素とする歴史像を追究したい。

5.3.2 仮設モデル

さて、情報史の基本構成要素は何だと考えればよいか。

まず、上記の見解に拘らず、筆者は基本的に、情報に関わる主要な因子はコミュニケーションの動的な過程であると見なしている。そして、むしろ社会的事象や自然を環境要因とみなしたい。こうした立場から、情報史の歴史像についての仮設的モデルを提示する。

形式化されたモデルは準備できていないので、主たる特質を記述的に述べるに留める。現段階では完全に個人的な考えをもとに構成しているため、一般性はまったく持たない。したがって、さらに精緻化した上で、ほかの対案との間での議論にさらされることが今後に必要なレベルであるということを、念の為確認しておく。

- (1) 情報史の主要な構成要素は、(心理的な仮想的実体としての)情報、およびその情報を生み出したり受容したりする認知主体(あるいは情報処理系)である。認知主体は、その時点で意識されている知識により構成される世界と、欲求等を反映し行動につながる意志とを主たる因子とする。
- (2) 情報は、認知主体と情報メディアとの間で相互作用が生じ、何らかの反映を受けることによって生じる。
- (3) 情報史の中心をなすのは、こうした意味での情報が、人類の歴史の中で種々の認知主体によって生成・伝達・蓄積されてきた、その過程である。
- (4) その過程は、個々の認知主体の内部構造(主観的世界)が情報メディアとの相互作用によって変化を受け、それを通じて情報が受容される過程である。さらにその過程を経て、

歴史的に「人類の知的遺産」の継承が生じたり、またある時点で喪失されたりする。

- (5) この中核的な現象を支援する基盤は、情報メディアとして応用される情報処理技術である。その周囲に、経済・政治的要素を含む社会システムが環境要因として存在する。

実際には、個々の認知主体にとって、経済的な現実や政治的現実といったものは、情報現象の環境要因というよりも、自己の世界を形成する要素であろう。しかし、それはあくまで認知主体により構成される社会像や政治・経済世界であり、個体の幻想か共同幻想といったものではなかろうか。一定の約束ごとにより見えていだけであり、情報現象を支えるメカニズムとしての環境要因とは別に扱った方がよい。

さて、情報史の歴史像自体も同様に、まさにこの論文で論じたような一定の約束ごと（情報史・情報学の枠組み）により見える世界像はあるが、一方でほかの個々の認知主体の世界像を対象化して眺める超越的な世界像ということができる。情報史は、かくして、歴史的・社会的文脈で生み出された多様な世界像の集合であり、同時に自身（情報史の歴史像）もその中にあるという再帰的（recursive）な世界像ということになる。

もちろんこのような記述のままではわかりにくいので、この考え方をモデル化する仕掛けとして、現在、情報空間という概念を多層的・多面的な空間の概念として精緻化する作業を進めている [40] [41]。まず、情報空間という語で表現される対象を検討した [40]。その論文では、個別の用法をすべて混合すれば情報現象に関わる要因がすべて含まれ、とくに心理的過程と実体概念としての情報とが混在するというところに着目している。その論文では、それが属する文脈を「情報に関する存在論」としているが、研究の背景にはやはり情報学の学際性的の問題がある。このように、情報史の歴史観も情報に関する存在論（ないしコスモロジー）も同種の問

題であると筆者は考えている。

さて、上記の考え方を情報空間の概念を援用したモデルとして精緻化できれば、それを背景にした情報史研究は、情報空間の時間的な変化を探求・記述する営みと説明することができる。

こうした空間論を歴史モデルに応用すれば、筆者の考える情報史研究に適した歴史像が得られるものと考えられる。

6. 結論

過去は情報の集積である。情報史研究では、史料という「情報源」の分析を通じて「情報を獲得」する。これは歴史研究一般にもいえることだろうが、情報史研究の場合、当然ながらこうしたことを一層意識する必要があるし、また情報から成る混沌の海と対峙しながら「情報に関する歴史像を形成する」ものといえる。

本稿では、こうした情報史研究を「情報学の考えを歴史に適用することである」と見なす考えをさらに掘り下げ、情報学基礎研究から恩恵を受けたり、また情報論の検証の場となるという「植民地的」な位置ではなく、情報史独自の歴史観・歴史モデルを形成する作業を進めることによって、情報学の基礎付けや統合に貢献するだろうとの考えを導き出した。

こうした考察のさらなる帰結は以下のとおりである。

情報史研究は、むろん仮説設定や史料分析といった個別の調査の累積でなされるべきである。しかし、情報史の探求全体とは（科学史の本質は文学であると述べた村上 [32] の言にならって言えば）哲学的営為であると言って差し支えないのではなかろうか。

そこまで言わないでおくとしても、情報に関わる種々の歴史学的研究のほか、筆者の情報空間概念の探求のような基礎的論考にも力を入れることが情報史研究にとって有益であるといえる。

- [01] Stevens, N. D. The history of information. *Advances in Librarianship*. Vol.14, p.1-48 (1986) (情報史. 根本彰; 糸賀雅児訳. 情報の科学と技術. Vol.42, No.3, p.269-283, No.4, p.371-383, No.5, p.475-482 (1992))
- [02] 村主朋英. 情報史のための枠組みと方法論. *Library and Information Science*. No.32, p.43-64 (1994)
- [03] 村主朋英. 情報・ドキュメンテーション年表. 情報の科学と技術. Vol.43, No.4, p.356-367 (1993)
- [04] 津田良成. 知識情報を扱う図書館情報学とそのカリキュラム. 日本農学図書館協議会会報. No.75, p.1-24 (1989)
- [05] 津田良成, 糸賀雅児, 真弓育子. “1. 図書館・情報学とは”. 図書館・情報学概論. 津田良成編. 第2版. 東京, 勁草書房, 1990. p.1-38.
- [06] 村主朋英. 情報学思想史の枠組み. 1989年度三田図書館・情報学会研究大会予稿集. p.52-55.
- [07] 謝世輝. 人間と情報：ユーラシア文明の視点から. 東京, 新時代社, 1973.
- [08] 編集工学研究所編. 情報の歴史. 松岡正剛監修. 東京, N T T出版, 1990.
- [09] 小山田了三. 情報学・情報史. 東京, 東京電気大学出版局, 1993.
- [10] Schneider, Paul. Library history in the Netherlands. *Libraries & Culture*. Vol.25, No.1, p.4-10 (1990)
- [11] 北川敏男. “文明の歴史像：情報史観へのプロレゴメナ”. 情報社会科学講座. Vol.17-II. p.109-168. 北川敏男編. 東京, 学習研究社, 1979.
- [12] 津田良成編. 図書館・情報学概論. 第2版. 東京, 勁草書房, 1990.
- [13] Vickery, Brian; Vickery, Alina. *Information Science in theory and practice*. London, Butterworths, 1987.
- [14] Shera, Jesse Hauk; Cleveland, D. B. History and foundations of information science. *Annual Review of Information Science and Technology*. Vol.12, p.249-275 (1977)
- [15] Machlup, Fritz; Mansfield, Una, eds. *The Study of Information: Interdisciplinary Messages*. New York, John Wiley, 1983, 743p.
- [16] 倉田敬子, 杉本由利子. 情報の研究の多様性. 図書館学会年報. Vol.32, No.3, p.133-140 (1986)
- [17] 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科. わが国の大学における情報関連研究・教育の多様性. 東京, 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科, 1989. 72p.
- [18] 岸田和明. 大学教育における情報化：学部・学科の名称とカリキュラムの分析. 情報の科学と技術. Vol.40, No.1, p.7-11 (1990)
- [19] Breton, Philippe. *Histoire de L'informatique*. Paris, Editions la Decouverte, 1987.
- [20] 北川敏男. “情報科学の構想”. 情報科学講座A-1-2巻：情報科学の動向Ⅰ. 北川敏男編. 東京, 共立出版, 1968. p.1-17.
- [21] 北川敏男. 情報科学的世界像. 東京, ダイヤモンド社, 1977. 190p.
- [22] 北川敏男編. 講座：情報社会科学. 東京, 学習研究社, 1971-1979.
- [23] 北川敏男. 情報学の論理：制御から創造への新次元. 東京, 講談社, 1969. 189p.
- [24] 坂井利之編. 情報科学の基礎研究. 東京, オーム社, 1990. 325p.
- [25] Wersig, Gernot; Neveling, Ulrich. The phenomena of interest to information science. *Information Scientist*. Vol.9, No.4, p.127-140 (1975)
- [26] Belkin, Nicholas J.; Robertson, Stephen E. *Information science and the phenomenon*

- of information. Journal of the American Society for Information Science. Vol.27, No.4, p.197-204 (1976)
- [27] Belkin, Nicholas J. Information concepts for information science. Journal of Documentation. Vol.34, No.1, p.55-85 (1978)
- [28] Dervin, Brenda. Useful theory for librarianship: Communication, not information. Drexel Library Quarterly. Vol.13. No.3, p.16-32 (1977)
- [29] Ingwersen, Peter. Information and information science in context. Libri. Vol.42, No.2, p.99-135 (1992)
- [30] Ingwersen, Peter. Information Retrieval Interaction. London, Taylor Graham, 1993. (藤原鎮男監訳. 情報検索研究: 認知的アプローチ. 東京, トッパン, 1995)
- [31] Le Coadic, Yves F. Histoire des sciences et histoire de la science de l'information. Documentaliste, Sciences de l'information. Vol.30, No.4-5, p.205-209 (1993)
- [32] 村上陽一郎. "科学史の哲学". 科学史の哲学. 村上陽一郎編. 東京, 朝倉書店, 1980. (知の革命史第1巻)
- [33] Borges, Jorge L. 伝奇集. 篠田一士訳. 東京, 集英社, 1968. (原著: Ficciones (1935-1944). Buenos Aires, Sur, 1944. 203p.)
- [34] 石沢篤郎. コンピュータと社会科学. 東京, 大月書店, 1987.
- [35] 糸賀雅児. 情報利用における「意味」と「理解」: 「意味付与」概念にもとづく情報ニーズの再検討. Library and Information Science. No.29, p.1-19 (1991)
- [36] 村主朋英. Karl Popperの“客観的知識”概念とその情報学に対する意義. Library and Information Science. No.24, p.1-10 (1986)
- [37] 吉田民人. 自己組織性の情報科学. 東京, 新曜社, 1990. 296p.
- [38] 吉田民人. 情報と自己組織性の理論. 東京, 東京大学出版会, 1990. 295p.
- [39] 吉田民人. “社会情報学の構想とその背景: 新しいDisciplineの誕生をめざして”. 記号と情報の行動科学. p.325-350. 木下富雄, 吉田民人編. 東京, 福村出版, 1994. (応用心理学講座4)
- [40] 村主朋英. 情報空間という語の用例の分析: 情報学のための空間概念の構築を目指して. Journal of Library and Information Science. Vol.8, p.87-107 (1995)
- [41] 村主朋英. 情報空間概念の精緻化のための予備的考察. 情報処理学会研究報告. Vol.95, No.45, p.37-44 (1995) (情報学基礎研究会報告. No.37;95-FI-37-6)